

翻訳シフトの多次元分析方法論（1）

Methodology of Multi-Dimensional Analysis of Translation Shifts (1)

河原清志

Kiyoshi KAWAHARA

1. はじめに一翻訳シフトの多次元分析

1.1 イントロダクション

翻訳テキストをどう分析すべきか。これは翻訳研究ないし翻訳学が理論的な取り組みとして試みてきた最も大きな関心事のひとつと言える。そこで本稿は翻訳の根源として「等価の構築性」（河原, 2015a）に基づいたうえで、翻訳テキストをどのように分析するかを中心に数回にわたって論じていく。

AとBとの等価、つまりAがもつ価値とBがもつ価値とは等しいものであると見做すという、カテゴリー化という人間の認知的営みは、一回一回の記号的コミュニケーション行為において人がその都度行うものである。それが翻訳という行為であるならば、翻訳行為とは、起点言語の特定の言語リソースによって表出されたものを、目標言語の言語リソースを使って等価なものと見做すことによって特定の言語リソースを主体的に選択し目標言語で表出する行為であると言える。しかしながら、この「等価」判断は可変的・相対的であり、それを判断する人が取り巻く諸々の社会文化的コンテキストやイデオロギー・価値観、認知モードの意識的／無意識的な変換などによって絶えず変動し、無限更新を展開するものである。したがって、ある一点の時間において、等価判断がなされた結果がテキストとして現れたもの、それが翻訳物であると

言える。となると、原理的には再翻訳を行う、つまりある一点の時間を複数取る、つまりは等価判断を複数回行った結果というのは、何らかの求心的力を持って何らかの収斂点を目指しつつも（等価性契機）、何らかの遠心的力を持って広がり、ばらつき、シフト、変種をも生み出す（不確定性契機）。この求心力とは何か、収斂点はどのようなものか、遠心力とは何か、具体的にはどのようなばらつきがありうるのか、について問い直しをしていく作業を「翻訳テキスト分析」としてどのようにアプローチしていくのが重要になってくる。そのことについて論じるのが本稿の主意である。

1.2 翻訳テキスト分析の位置づけ

ここで、この「翻訳テキスト分析」という行為が翻訳研究の全体的布置のなかでどのような位置づけにあるのか、この分析行為がもつ相対化された立ち位置とは何かについて明らかにしておく必要がある。まず本翻訳テキスト分析の目的は記述研究であって（cf. 河原, 2015b）、もしこれが結果として翻訳教育や翻訳評価／批評の便に資することになれば、それは望外の副次効果である。しかし、あくまでも記述研究を目的としているため、本稿では操作的にある種の比較のための基準を立てるが、その基準から乖離している／一

致している、という表層的なテキスト上の指標のみで、質の良し悪しを決するものではないことは留意したい。また、関与的アプローチ (cf. 河原, 2015c) であれば、ある特定の政治的・イデオロギーの大義を実現する一環として翻訳行為を位置づけるが、そのような大義実現という目標から見たトップダウン式のテキスト評価を下すものでもない。逆に、テキスト分析を通して詳らかになってくる翻訳者のイデオロギーや何らかの大義名分が析出されるのであれば、それはある種の推論的仮説として導出できるものである、という位置づけになる。

次に、本テキスト分析は記述研究であるがゆえに、その研究対象は翻訳シフトであり、翻訳ストラテジーではない。翻訳ストラテジーとは翻訳者が意識的にシフトを起こさせる、または最小限に抑える転換操作のことであると概念定義される (河原, 2014a, 2014b)。これを受けると、翻訳者による意識的・無意識的解釈行為の発露たるテキストを分析したものは、意識的な行為の結果 (ストラテジー使用の結果) のみを扱うものではないことになる。したがって、本翻訳テキスト分析は、翻訳シフトを扱うものである。では、シフト、つまりズレは何と何のズレか。通常、翻訳シフトと言えは起点テキストと目標テキストとの間に存在する乖離のことを指す。しかし、本稿は翻訳相対性を分析するものであり、その相対性とは複数の翻訳結果どうしに認められるものである。したがって、本稿が扱う翻訳シフトは複数の翻訳結果間のシフトをも含んでいる。そしてこの翻訳シフトは、言葉の意味が多層的であり、それを分析する理論軸も多次元的事であることに呼応して、翻訳シフトも多次元的に分析することが必要になってくる。したがって、その分析軸の多次元性を示しつつ、どこにシフトが生じているのか、

そしてシフト間の相互関係はどのようなものかについて論じてゆくことになる。

1.3 翻訳相対性

では、翻訳シフトの多次元性を論じるうえで重要な「相対性」について考えてみたい。そもそも翻訳が扱う<言葉>はラング (langue : 言語) ではなくパロール (parole : 語用)、静的テキスト構造ではなく動的 (コン) テキスト過程の表出現象である。しかしながら、これまでの翻訳研究は前者をより前 (全) 景化させた論、つまり国民国家 = 民族言語 = 民族文化という一枚岩の言語が複数あり、その一枚岩の言語間での言語変換行為を扱う論、つまりは言語ナショナリズムを土台にした言語イデオロギーの産物であると言える。このような言語イデオロギーから展開したのは、「複数の言語」を比較対照するという言語理論、すなわち対照言語学や言語類型論の知見を応用した翻訳研究である。この点、Koller (1979) は対照言語学と翻訳の科学を区別し、等価自体を①外延的等価、②内包的等価、③テキスト規範的等価、④語用論的等価、⑤形式的等価、という5つに分類したが、これはラングのレベルとパロールのレベルを同一地平上に載せた分類で、必ずしも適当ではない体系化であると言わざるを得ない (この点、Baker, 1992/2011 なども同様の誤謬を含んでいる)。

しかしながら繰り返しになるが、本来的に翻訳がパロール (語用)、すなわち翻訳というコミュニケーション行為の一回性・固有性を扱うものであるならば、一枚岩の「複数の言語」に照射するのみならず、同一の「言語の複数性」にも照射する必要がある (cf. 藤本, 2009, pp. 43-44)。さらには、同一「言語の複数性」のみならず一回一回の「言説の複数性」にも照射する必要もある。つまり、

サピア=ウォーフ仮説で知られる言語相対論は、一般的に複数言語間の相対性のみ限定して論じているが、ここではその限定的な前提枠を拡大し、言語相対性の複層性を正面から認め、言語間／言語内／コミュニティ間／コミュニティ内／個人間／個人内の各相対性（但し、これらはすべて非離散的な範疇）を丹念に分析することで析出される結果を微細に見る必要がある（cf. Kay, 1996 による *intra-speaker relativity*）。そうすることで翻訳物の産出の際に翻訳者が紡ぎだす言説の社会的なバラツキ／ズレが考察でき、以って翻訳物の社会的な多様性を論じ、＜翻訳の多様性＞によって特徴づけられる社会文化の記号論的体系、言語間翻訳のみならず言語内翻訳まで含み込んだ記号間翻訳という本来の記号としての言語の営みを総合的に示すことができることとなる。

そこで本稿では複数回にわたって、まず(2) 言語機能と言語観に関する根本的な議論

を行い、そのうえで、(3) 起点言語=目標言語（ラングレレベル）の比較対照参照枠を言語論として語彙範疇、文法範疇各次元でのシフト分析を検討し、さらに(4) 起点テキスト=目標テキスト（パロールレベル）の比較対照参照枠をテキスト構成、および（広義の、行為論としての）語用論の次元で行い、最後に(5) 起点文体=目標文体（フィギュールレベル）の比較対照参照枠を文体論の次元で論じるという構成を採る。

2. 言語機能論と言語観

まずは本稿が採用する言語分析の局面、レベル、対象、次元、および言語機能の相関を示した表を掲げる（表1）。この表は、上から言語の象徴性を扱うラングのレベル、真ん中が指標性を扱うパロールのレベル、下が言語の詩的機能（ある種の類像性）を扱うフィギュールのレベル、となっている^{註1}。本稿はこの順番で細部を検討することとする。

表1：言語テキストの重層性と言語機能

局面	レベル	対象	次元	言語機能
言語構造	ラング	語彙範疇	意味論的次元	言及指示機能, メタ意味論的機能
		文法範疇	統語論的次元	
言語行為	パロール	テキスト構成	テキスト機能的次元	言語行為的機能, 社会指標機能, メタ語用論的機能
		語用実践	語用論的次元	
詩学	フィギュール	文体様式	文体論的次元	詩的機能

これを言語機能論と関連させて論じると、ヤコブソンの六機能モデル^{註2}のうち、言及指示機能が前景化するのはラングの次元、表出的・動能的・交話的機能（ここでは一括して言語行為的機能とする）が前景化するのがパロールの次元、詩的機能が前景化するのがフィギュールの次元ということになる。メタ言語的機能のうち、メタ意味論的機能が前景化するのはい意味論的次元に還元されるのでラ

ングの次元、メタ語用論的機能が前景化するのはい語用論的次元に還元されるのでパロールの次元、ということになる。また、社会記号論による言語機能論からすると、ラングの次元では言及指示機能、パロールの次元では社会指標機能が前景化する、と位置づけられる。

さて、認知言語学の陣営からは、発話（という行為）は内容・認識・言語行為の三位一体であり、以下の3つの領域（=世界）が設

定されていると考える見方がある（スウィーツァー, 2000[1990]）。

- (i) 現実世界（=内容）領域
- (ii) 認識領域
- (iii) 言語行為（=会話）領域

私たちが論理・思考のプロセスととらえる場合、そのとらえ方は、社会的・物理的世界に基づいてなされている。同時に、言語表現そのものも、(i) 記述（世界のモデル）として、(ii) 認識的・論理的実体（推論世界における前提や結論）として、(iii) 行為（記述されている世界における行為）として、形作られている。これら4つの、語の場の意味論は、総体的に、当の領域に関する認知的・言語的などらえ方がメタファー的に構造化されていることを実証する強力な証拠となるだけでなく、意味論・語用論と統語構造との相互作用に関して解明の光を投げかけてくれるものでもある（スウィーツァー, 2000[1990], p. 32）。

こうしたすべての研究者の研究から明らかになると思われることは、「多領域構造」という一般的な概念を用いずして、言語の意味を分析することはできないということである。本研究で論証したことは、ある領域を別の領域を通してメタファー的に構造化することの必要性であった。そして、最も重要なことは、同一の基礎的な領域構造の幾つかが、一見バラバラの分野におけるそれまで謎とされた現象に関して、首尾一貫し、啓発的な説明を提出することができるとい証拠があるということである。すなわち、(i) 意味変化、(ii) 多義性構造、(iii) 文接続の解釈、という3つの分野である。特に興味深いのは、言語行為領域が

（可能な構造化の1つとして）内容領域によって構造化されていることである。言語行為の力（force）とは、現実世界における力がメタファー的に拡張されたものであるととらえるならば、言語行為の力という概念は新しい次元を獲得することになる（スウィーツァー, 2000[1990], p. 208）。

スウィーツァー（2000[1990]）が扱っている研究対象は、印欧語における知覚動詞の意味変化や英語の法助動詞の意味体系、接続詞、そして条件文であり、これらの発話が上記の3つの領域で観察されそれが語用論的多義を生んでいるという事実のみならず、通時的な多義派生プロセスも人間のメタファーの機制によりこの順で展開していくとした。この事実を言語機能論に当てはめるとするならば、すなわち、(1) 内容、(2) 認識、(3) 言語行為という領域に呼応して、(1) 言及指示機能、(2) 認知機能、(3) 言語行為的機能、と読み替えが可能である。

このように、認知言語学的視座からは、言語機能として「認知機能」（外界ないし内面を言語によって知覚・認識・認知ないし意味づけする機能）を認めることになるが、本稿はこの機能を研究操作上、積極的に採用してゆきたい（この機能を積極的に認めることの限界点を見極めるためにも）。

これに関し、本稿が依拠している言語人類学の視座からは、根源的な反論が想定される。それは、機能主義言語学を唱える諸氏の学説へのM. シルヴァスティンからの徹底した批判に端を発する。これは、名詞句階層の解釈を巡って両者にかかなり大きなズレがあり、激しい論争へと展開した歴史的経緯がある（小山, 2009, p. 16）。名詞句階層に関し、シルヴァスティンはパース、ヤコブソン、（ポスト）分析哲学やミクロ社会学などに基づいて「指

標性」によって階層化を説明したのに対し、他の機能文法学者の多くはそのような参照軸を持たず、「人間主体の、言及対象への感情移入（empathy）の度合いの階層」などのように語る主体である人間の普遍的な心理的法則によって、主体主義的、人間主義的、心理主義的（あるいは民俗理論的、民俗心理学的）に捉えたことに対して、シルヴァスティンがあくまでもコミュニケーションという社会文化的な出来事の原理の視点から解釈すべきだと批判したのである（Silverstein, 1981; 1985）。これは、「人間とその心理、ないし『自然』から言語を解釈するのか、あるいは、言語、コミュニケーション出来事から人間とその心理、『自然』を解釈するのか、つまり、人間主義（ないし自然主義）か、ポスト人間主義（言語・コミュニケーション出来事中心主義）か、という根本的な思想・方法論のレベルで異なりをみせる」ということである（小山, 2009, p. 20）。人類学者＝シルヴァスティンからすると「哲学者、思想家や言語学者たちなど、近現代西洋文化の住人たちが『自然化』（当然視）している（心理的）概念、世界や自然、人間や心などについての理解が、えてして、言語などの歴史的無意識によって規制された民俗理論的、民俗心理的、自文化中心主義的なものにすぎない」のである（小山, 2009, p. 21）。

してみると、この認知言語学なる学派は、この学派の元々の生みの母体でもあり訣別の母体でもあるチョムスキー派などの形式主義の言語学者たちと同じく、心理主義的、民俗心理学的な思考を有しており、批判の対象となる学派として言語人類学派から捉えられることになろう。

しかしながら、認知言語学の学問メタファーである言語観、すなわち「言葉は人の認識の反映である」（山梨, 2004など）とする

テーゼを、翻訳研究の土俵で積極的に検証する好機として、本稿では操作的に採用したい。それは、社会言語学の学問メタファーが「言葉は人の社会的属性や社会的関わりでの反映である」とする言語観であることと、どのような関係があるのか、という言語学における重要な問いかけへ応答する営みでもある。また、意味づけ論（深谷・田中, 1996; 田中・深谷, 1998）に着想を得て言葉の本質的な言語的側面と機能的な社会的側面を言い表した「言語とは価値の創造を生む、動くゲシュタルト」であるという田中の謂いも、これに大いに関係してくる。

この問いかけが最も先鋭化するのが、「翻訳不可能性」「翻訳不確定性」「翻訳の多様性」の問題系である。この点、社会言語学の立場から小山は、「社会言語学的多様性と翻訳不可能性：メタ語用、言語変種／接触、社会指標性と記号論的全体」という論稿を提出している（小山, 2011b）。その中で、要約として以下のまとめを冒頭で記している。

1. 近代の翻訳論は、一般に、「翻訳」を言及指示機能と国民国家／民族言語＝文化（言文一致的標準語、少数民族言語＝文化など）に基づいて解釈してきた。
2. 「（一般化された）翻訳」、つまり記号論的な意味での「翻訳」は、ラング（言語）ではなくパロール（語用）、言及指示機能ではなく社会指標機能／コミュニケーション出来事、テキストではなく（コン）テキスト化の過程に主に関わる現象である。
3. 翻訳不可能性は、主に、言及指示機能ではなく社会指標機能、言語変種、社会言語学的多様性、コミュニケーション出来事の固有性／偶発性と結びついている。

4. (社会言語学的)多様性の根幹は、(少数)民族言語などではなく、社会指標的な次元、特に、社会文化的にコンテクスト化された出来事の固有性/偶発性にある。
5. 「多様性を促進する翻訳」は、グローバリズム、ナショナリズム、ローカリズムに関わる社会経済や文化イデオロギーを含む記号論の全体の中で考察されなければならない。
6. 接触言語と言語消滅、接触の強度、都市化、社会経済的ネットワークに関するマフウィニの議論と、少数言語と翻訳に関わるクローニンのポスト・コロニアル文化論的な議論を交差させ、後者の翻訳イデオロギーを批判的に吟味、そこに見られる「グローバルなディスコース過程とナショナルな少数(民族)言語=文化」という欧州(EU)中心主義的現代翻訳論の図式、延いては、欧州言語変種としてのピジン/クレオールを排除した(非明示的に)人種論的な言語イデオロギーを浮かび上がらせる。

これらの言明には、(1)言語観をめぐる重要な論点を含んでいる。すなわち、これまで言語は一枚岩的に捉えられてきたこと、その背後には言及指示機能のみに照射された言語意識があり語用論的多様性が捨象されてきたこと、国民国家=国民文化=民族言語という近代言語イデオロギーがあること、などの社会言語学的視座からの重要な言明である。と同時に、(2)「翻訳不可能性・不確定性・多様性」の問題系にも大変重要な示唆を与えている。翻訳はパロール(語用)の局面であり社会指標機能が前景化するコミュニケーション出来事や(コン)テキスト化のプロセスに

主に関わる現象であること、翻訳不可能性は、二言語間の言語構造に起因するよりも、主に言語変種、社会言語学的多様性、コミュニケーション出来事の固有性/偶発性に起因すること、翻訳不確定性・多様性は社会指標的な次元、特に、社会文化的にコンテクスト化された出来事の固有性/偶発性が理由であること、である。

(1)については別稿に譲ることとして、(2)について見ていきたい。社会言語学的な視点から見た「翻訳不可能性・不確定性・多様性」の契機は、一回一回のパロール(語用)の多様性、固有性、偶発性であると説明がなされ、この多様性、固有性、偶発性は社会文化的なマクロコンテクストとマイクロコンテクストの諸要素による絶え間ない可変的な化学反応による、ということになる。その諸要素とは、D. ハイムズが提唱したSPEAKINGモデルによると以下のとおりである(Hymes, 1972)。

- S: Setting; Situation (時間、空間的状況; 時間や場所などの物理的状況、心理的状況)
- P: Participants (会話の参加者; 話し手、聞き手など)
- E: Ends (目的)
- A: Act Sequence (連鎖行為; 何をどのよ
うな順番で発話するかという構成)
- K: Keys (会話の雰囲気; 冗談、皮肉、真
面目など声のトーンや調音などの調子)
- I: Instrumentalities (会話の手段・形態:
口頭、文字などのコミュニケーション
媒体、面談・電話・手紙・標準語・方
言などの発話形式)
- N: Norm (相互作用や解釈における適切
性に関する規範)
- G: Genres (コミュニケーションのカテゴ

リー：手紙、詩、お祈り、スピーチなど）なるほど、ポスト人間主義的コミュニケーション観に依拠すれば、このような社会的諸要因を客観的に分析することで、具体的に発せられた当該パロールの性質を決することができるであろう。つまりこれは、言語、コミュニケーション出来事から人間とその心理、「自然」を解釈するという分析の方向性である。この手法においては、「人間」はひとつの社会的コンテクスト要因として他の諸要素のなかにいわばうずもれている。他の諸要素と併せて、当該コミュニケーション参加者の社会的属性といった下位の諸要因を同定し、そこから言語のあり方を見るところである。

しかしながら本稿は、操作上これに敢えて反する方法論も同時に採用してみたい。すなわち、人間主義的コミュニケーション観に依拠し、人間とその心理ないし「自然」から言語を解釈する、すなわち、人の「認識、認知、意味づけ」のありようを認知意味論から探り、そこから言語のあり様を解釈する、というものである。

方法論的には、以下のとおりである。基本的な言語機能として、①言及指示機能、②認識機能、③言語行為的機能（社会指標機能も含む）、の3つを認め、①がラング、つまり言語構造のレベル、③がパロール、つまり言語使用のレベルであると操作上、位置づける。そして、ラングレレベルでの意味・統語・テキスト構成の諸次元について、認知言語学に依拠した説明を施す。次に、パロールレベルでの語用の次元について、ラングレレベルの諸次元を社会指標的機能の観点から、言語人類学的普遍文法の枠組みで分析する。換言すれば、①の観点から言語構造を分析し、それを③の観点から行為論の地平として再分析する、ということになる。そしてその背後にある人間

の意味づけの営みを②の観点から問い直しをする、というものである。この②の観点には、意識／無意識の両複合体を指定し、イデオロギー（ideology；虚偽意識）やアクシオロギー（axiology；価値観）、個人の経験を基盤にした長期記憶（これには極めて個人的なものからコミュニティが共有する集団的記憶までがある）といった言語使用者の「個性」が前景化するものから、人が有する抽象的な認知能力（知覚・記憶・思考・学習・類推・連想・比喩・カテゴリー化・イメージ形成などの心理作用や、感情などの生理的作用に関する能力、および身体的な運動感覚を含む、人間が内在的に持つ能力の総体。菅井, 2013, p. 281）までを含むものとする。①の観点からの言語構造分析では、意味論、統語論、そして（分類上③に含めてはいるが一部）テキスト構成論も含めて各次元での認知的動機づけを体系的に説明する。また③の観点からの言語行為的側面の再分析の段階では、意味づけの不確定性の視点から社会指標機能とアイデンティティ、言語変種・社会言語学的多様性と意識／無意識、コミュニケーション出来事の固有性／偶発性と個人の長期記憶との関係性などの論点を体系的に論じて行きたい。

このように本稿では、「言語構造」という言語的地平と「言語行為」という社会的地平を結節する理論装置として「認知」（意味づけ作用）を積極的に認めることによって、コミュニケーションの参加者である「人」にフォーカスを当てる言語観、コミュニケーション観を操作上敢えて採用し、「対象－記号－解釈項」が織り成す無限更新の意味づけのダイナミズムの観点から、「翻訳不可能性・不確定性・多様性」の問題群に迫ってゆく。

3. 起点言語＝目標言語間シフト

前述のように起点テキストと目標テキスト

の間のシフトは二言語におけるパロールレベルでの分析であるが、各テキストがリソースとして使用している言語どうしのラングレレベルでの対応関係も同時に見ておく必要がある。ラングレレベルでの対照言語学・言語類型論の知見を土台として初めて、パロールレベルでの翻訳シフトの分析が可能だからである。

ここで言語間翻訳について語られる一般的な論を検討しておきたい。実務家のモットーないし翻訳教育者の模範提示の方便として語られる一般的な言説に、よい翻訳とは、(1) 正確で (Bakerの言う「正確さ」accuracy)、(2) わかりやすい (Bakerの言う「自然さ」naturalness) 翻訳である、という謂いがある (安西・井上・小林, 2005, pp. 49-65, 68-89; Baker, 2011, pp. 60-63など)。しかし、何を以て正確でわかりやすい翻訳とするかについては、「直訳」対「意訳」の古典的な二項対立 (Munday, 2012, pp. 29-31) 以来、実務上も理論上も解決を見ていない。

ところが、この素朴な論 (folk theory: 民間理論) の中にも、注目に値する点が含まれている。言語の「自然さ」や「その言語らしさ」というものである。確かに一般的な意味で、ある特定の言語の「自然さ」や「その言語らしさ」は心理レベルで存在していることは否定できないし、その言語の話者であれば誰しもその言語の「自然さ」や「その言語らしさ」を支える「言語感覚」を持ち合わせている (と措定される)^{註3}。この「言語感覚」には、(1) 語彙レベルにおける範疇化 (categorization) の問題として捉えられる側面、(2) 文法範疇レベルにおける事態構成 (construal) の問題として捉えられる側面、(3) テキストやレトリックのレベルにおけるテキスト構成 (text organization; textuality) の問題として捉えられる側面 (メイナード, 2004) など、諸側面がある。そこで本稿では、翻訳シフトを分析

するに当たり、「言語感覚」というときの「感覚」の諸側面ないし多次元性に通底する等価性契機の潜勢態を、その言語の特徴、もつともらしさ、自然さを表象する何らかの典型 (prototype) であると位置づけ、語彙範疇、文法範疇、テキスト構成の各次元においていかなるプロトタイプが措定できるかについて以下で説明する。

ここで原理論的な位置づけを示しておく必要がある。記述研究の操作上措定するこの「翻訳プロトタイプ」とは、目標言語によって表されるものであると本稿では位置づける。理由は以下のとおりである。これまで、起点テキストと目標テキストとの間の等価なりシフトなりを分析する際に、何らかの比較のための第三項 (tertium comparationis) を立てる理論上の工夫がなされてきた。ひとつは K. ヴァン・ルーヴァン・ズワルトが提唱した Architranseme である (van Leuven-Zwart, 1989, 1990)。この Architranseme は、起点テキストの transeme (起点テキストと目標テキストの対応関係を見るための理解可能なテキスト単位) の不変のコアな意味を定義するものであり、「比較のための第三項」として機能する、としている (van Leuven-Zwart, 1989, p. 155-170)。その批判のポイントは、不変テキストに依拠して、そこから不変のコアな意味を定義するという操作手順である。transeme の認定の恣意性もさることながら、仮に transeme が正当に認定できたとしても、その記述を起点言語に頼ってしまっている点が原理的に失当である。その理由を詳述してみたい。

起点テキストを transeme に仮に分解できたとしても、それを Architranseme へと書き換えることは言語内翻訳であり、この翻訳行為もまた、ある種の人為性、つまり等価構築性を有しているものである。そもそも、ある

テキストの意味を確かめるには何らかの記号操作を要し、その使用する記号はメタ記号（記号を解釈し、説明するための別の記号）として作用する。このメタ記号には、統語構造分析のための線や矢印、ツリー表記などの記号でもよいし、心的表象を表すイメージ図やイラストでもよいし、あるいは音楽や映像というメディアで再構成してもよい（記号間翻訳）。あるいは、そのもっとも類像的に近似したメディアを使うのであれば言語でもよいことになる（言語間翻訳、言語内翻訳）。どのような記号メディアを使うかはメタ記号によってどのような意味を説明するかという目的によるのである。本稿が取り組む翻訳テキスト分析は、起点テキストと単数または複数の目標テキストとの比較によるシフト分析である。この目的に資するためには、どのようなメタ記号を使うのが最適であるかが論点となる。

この点、記号媒体としては、言語が最も合目的である。けだし、本研究の主意が起点テキストと目標テキストといういずれも言語どうしの比較対照のモデルを提示することであるところ、他の記号メディアを使うと言語メディアとの乖離（ズレ）が言語どうしの乖離よりも甚だ大きく、比較の基準として機能しづらいためである。この点、通訳の解釈モデルを応用した M. レデレール（1994年）の翻訳の三段階のプロセスは、(1) 読みと理解、(2) 脱言語化、(3) 再表現、(4) 検証（Delisle, 1982/1988による追加）というモデルであり、(2) 脱言語化されたいわゆる裸の意味が比較のための第三項として機能するという意見もある（Lederer, 1994）。しかし、脱言語化されたノンバーバルな心的表象をどのように造形化して比較のための客観的な基準にできるのか、そのような物象化されていないものにどのようにアクセスするのかという原理的な

問題がある。

では、言語メディアを使うとして、具体的にはどのようなものが最適であろうか。選択肢としては、①起点言語へのパラフレーズ（言語内翻訳）、②目標言語への翻訳（言語間翻訳）、③その他の言語への翻訳（言語間翻訳）が理論上考えられる。まず①は K. ヴァン・ルーヴァン・ズワルトの説への批判がそのまま妥当する。いかなるパラフレーズをしても、目標テキストとのシフトは二言語間の構造的相異によって生じることは必至であり、基準としてのブレが生じてしまう。③については、第三言語を導入することで、さらに比較の対象が徒に増えてしまうだけであって、シフト分析が複雑になりすぎてしまう。そう考えると合目的的には、②が最もよさそうである。では、どのような②を採用したらよいのであろうか。

ここでの記述研究の目的は、目標テキストがどのような項目において（等価の位相）、どのような態様で（等価の質）、どの程度（等価の量）、起点志向であったり目標志向であったり、あるいは起点テキストから離れた独創性志向であったりするかの分析である。だとしたならば、目標言語内で特定の目標言語リソースを使って構成した比較となるテキストを措定し、分析対象たる目標テキストと基準となる目標テキストとを比較対照し、両者のズレについてベクトル（方向とスカラー）を同定し分析することで、当該目標テキストの性質が決定できる。

理論上は、ポポヴィッチのいう原文の「不変の核」なるもの（cf. Bassnett, 2002, p. 33）は、等価性契機からは当然措定されるもので、その求心力によって目標テキストも無限定な拡散は成立しえないと言える。しかしながら、ポポヴィッチが「この要素の存在が経験的な意味の考察によって証明されるのである」と

したときの「経験的な意味」とはなにがしかの記号操作によるものであり、前述の①または②によって確かめることができるという結論になる（言語以外の記号では、メディアの違いによる乖離が大きい）。そして翻訳というコンテキストの中においては、この「経験的な意味」というのはすなわち②二言語間の翻訳行為という経験に他ならない（わざわざ起点テキストを起点言語にパラフレーズしてから目標言語に翻訳するプロセスは、ローカリゼーションにおける英語から英語への国際化や、機械翻訳におけるプレ・エディットなどの特定の限定された場面でしか想定されない）。したがって、ポポヴィッチの「変容ないしバリエーションというのは、意味の核は修正しないが表現形式に影響を与える変化のことである。要言すると、不変の核とは一つの原文に対して存在するあらゆる翻訳の間で共通して存在するもの、と定義できよう。」という謂いを承けるならば、「あらゆる翻訳の間で共通して存在するもの」を何らかの基準によって措定し、その基準からの乖離・逸脱の位相・質・量を分析することで、その「表現形式に影響を与える変化」を測る、という手続きが、最も合目的的であると思われる。

では、どのようにしてその「あらゆる翻訳の間で共通して存在するもの」という基準を定立するのがよいか。それは、前述の「その言語の特徴、もっともらしさ、自然さを表象する何らかの典型 (prototype)」に求めることができるのではないかと本稿では考える。これまで採用されていたこの種の翻訳にはいわゆる「直訳・逐語訳」(literal translation)がある。しかし、何を以って直訳・逐語訳と言いつけるのか、そもそも分析対象にしたい翻訳テキスト自体が直訳風のもの（つまり起点言語重視の訳）であるとしたならば、それと

どのような差別化を図れるのかという基準が曖昧である。では仮に直訳的なものを定立し、それと実際の目標テキストとを比較対照することで目標テキストの性質を明らかにする、という分析手続きでよいとしたならば、比較の基準となる直訳なるものの定立の仕方を精緻化しておく必要があるだろう。本稿が明らかにしたい翻訳テキスト分析は、原理上、起点テキストに存在すると想定しうる不変の核なるものが、目標テキスト産出過程でどのような項目において（等価の位相）、どのような態様で（等価の質）、どの程度（等価の量）変容するのか、「起点志向－目標志向－獨創性志向」の軸上で、どの程度乖離／一致するのか、である。以上より、本稿では、不変の核にできるだけ即した目標テキストと想定されるプロトタイプ的な目標テキストを操作上で定立したうえで、それと翻訳テキストと比較対照することによって翻訳シフトを多次的に明らかにする、という操作手続きを採用することとしたい。

4. 翻訳プロトテキスト

本稿では上述の「起点テキストの不変の核にできるだけ即したプロトタイプ的な目標テキスト」を操作上、「翻訳プロトテキスト」と称することとする^{註4}。この翻訳プロトテキストを上掲の表1に沿って順に論じていく。

まず、ラングのレベルで、意味論的次元として語彙範疇を対象に分析枠組みを素描する。語彙範疇（広く語彙部門を含む）には形態素、語、フレーズがあるが、本稿では主に語とフレーズに着目し、語の意味構造と訳語のプロトタイプ、フレーズの共起関係と訳語のプロトタイプを論じる（スキーマ／コア理論およびコロケーション理論）。次に、統語的次元として文法範疇を対象に分析枠組みを素描する。文法ないし統語構造には様々な理

論が提唱されているが、ここでは認知言語類型論に着目し、英語＝日本語の認知レベルでの構造の違いを詳らかにし、それに基づいて訳語のプロトタイプを論じる（なお、語彙文法論 *lexically-based grammar* は語彙意味論に位置づけて語彙範疇として扱う）。以上、ラングのレベルにおいて「翻訳プロトテキスト」を造形化し、これを分析対象たる具体的な目標テキストと比較対照する参照基準にする。そしてこれが「起点テキスト＝目標テキスト間シフト」の分析枠組みとなる。

次にパロールのレベルで、テキスト機能的次元としてテキスト構成を対象に分析枠組みを素描する。これは英日語間の情報提示順と統語構造の違いの緊張関係として説明されるもので、情報配列のプロトタイプを論じる。そのうえで、以上で検討したことを言語人類学的普遍文法によって検討する作業を行う。これは、①名詞句、②動詞・述語句・節、③言及指示継続範疇、④節結合範疇の位相において、分析対象である目標テキストが翻訳プロトテキストと比べて「起点志向－目標志向－独創性／介入性志向」の軸上で、どの程度乖離／一致するかについて、指標性の観点から分析する。そうすることで、翻訳シフトの位相・質・量を同定し、分析対象である目標テキストの等価構築のあり方を分析する、という手順となる。そしてこれが「目標テキスト相互間シフト」の分析枠組みとなる（目標テキストが単数の場合は、翻訳プロトテキスト＝目標テキスト間シフトの分析による当該目標テキストの分析枠組み）。

最後にフィギュールのレベルで、文体論的次元として文体様式を対象に分析枠組みを素描する。さしあたり、「文体」とは「文やその諸要素のような言語に固有のミクロ構造レベルに現れる— [中略] 構造 *structure* よりむしろ織物 *texture* のレベルに現れる—

言説の形式的な属性」であり（ジュネット、2004[1991], pp. 113-114）、「表現主体によって開かれた文章が、受容主体の参加によって展開する過程で、異質性としての印象・効果をはたす時に、その動力となった作品形成上の言語的な性格の統合である」（中村、1993, p. 162）としたうえで、議論を進めることとする。この次元での分析は、目標テキスト全体を通して、言語形式上、どのような異質性が認定でき、それがどのように当該翻訳者のアイデンティティの表出とつながっているかについて、上記の翻訳シフトの位相・質・量の分析結果を、翻訳テキスト全体を通して眺めることから分析するものである。

5. まとめ

以上が、本稿が目指す「翻訳シフトの多次元分析」の方法論である。次号から具体的な分析とその理論的根拠となる諸理論群の検討に入る。以下、予定である。

- ・ 起点言語＝目標言語（ラングレレベル）の比較対照参照枠を言語論として語彙範疇、文法範疇各次元でのシフト分析を検討する。
- ・ 起点テキスト＝目標テキスト（パロールレベル）の比較対照参照枠をテキスト構成、および（広義の、行為論としての）語用論の次元で行う。
- ・ 起点文体＝目標文体（フィギュールレベル）の比較対照参照枠を文体論の次元で論じる。

註

1. 米国・プラグマティズムの科学哲学者・パース（Charles Sanders Peirce: 1839-1914）が提唱した記号論（semiotics）に基づく以下の説明が可能となる。

記号一般について、対象（object）と記号（sign）との間に大きく、類像性（iconicity）、指標性（indexicality）、象徴性（symbolicity）という記

号作用がある。これを社会の中での記号作用という観点(社会記号論)から捉え直すと、次のようになる。まず、①この類像性は、対象(Object; O)と記号(Sign; S)とが同一/同等/類似/相似であることを示す記号作用であり、指標性はSがOの存在を示す作用、象徴性はSとOは恣意的な関係であることを示す作用となる。そしてこの記号作用は解釈項(interpretant; 解釈者による解釈)を通して「対象≒記号」であると解釈者が見なす、つまり両者の間に等価性を見出すという記号に対する人の認知作用であると位置づけられる。

と同時に、②この認知作用はその認知行為の一次的、偶発的で固有な意味作用でもあり、これは当該コンテキスト特有の意味を帯びる語用論的な解釈であって、当該等価構築行為の社会指標性をも有する。さらに、③これらの類像作用、指標作用の背後には、行為者のもつ信念体系や価値観といった象徴的な世界観が言語実践行為に意識的ないし無意識的に反映されている(象徴作用の反映)。

このように①類像作用、②指標作用、③象徴作用という3つの作用が三位一体となって複合的に意味構築を行いつつ、絶えず意味改変をしているのが人の言語実践行為の意味および意味づけのあり方である。

これを本稿で位置づけるならば、言語構造としてのラングは象徴性、言語使用実践の社会行為としてのパロールは指標性、言語の詩的機能などフィギュールは(ある種の)類像性、という位置づけとなる。

2. 六機能の定義について、ヤコブソン(1984[1980], pp. 101-116)は「言語学の問題としてのメタ言語」という章で次のように述べている(編集しつつ、抜粋する)。

・言語における6つの基本的な側面を区別してはいるものの、しかしただひとつの機能だけを果たす言語的メッセージを発見することは、まず難しい。言語の多様性は、これらいくつかの機能のどれかを占有するところから来ているのではなくて、それぞれが、さまざまの順位で階層化されているからである。あるメッセージの言語構造は、まず支配的な機能に依存する。けれども、なるほど指示対象への焦点あわせ(Einstellung)、<状況>へ

の志向—手短かにいえば、いわゆる<指示的>(referential)機能、外延的、知的機能—が数多くのメッセージの主要なつとめではある[中略]。

- ・<送り手>に焦点を合わせる、いわゆる<主情的>(emotive)もしくは「表出的」機能は、話題にされている対象への話し手の態度をじかに表現することを目指している。[中略]
- ・<受け手>への志向、すなわち<動能的>(conative)機能は、その純粋な文法的表現としては呼びかけと命令に現われ、これらは統語的にも、形態的にも、そしてしばしば音素のうえでも他の名詞範疇や動詞範疇から逸脱することがある。[中略]
- ・何よりもまず伝達を確立し、それを引き延ばしたり打ち切ったり、あるいは絡路が通じているかどうかを確かめたり、話し手の注意を惹きつけたり、自分がずっと謹聴していることを確認したりするためのメッセージがある。[中略] <接触>へのこの焦点合わせ、B. マリノフスキー(Malinowski)の用語でいう<交話的>(phatic)機能は儀式化された決まり文句のながながしい交換や、対話全体が単に伝達行為を長びかせることだけを目的にしたメッセージに現われる。[中略]
- ・<メッセージ>そのものへの志向(Einstellung)、このことだけのためにメッセージに対して焦点をあわせることが<詩的>(poetic)機能である。言語のさまざまの一般問題を抜きにしてこの機能を研究したとしても成果はあまり期待できないが、また逆に、言語を精密に吟味しようとすれば、その詩的機能の考察を欠かすことができない。[中略]
- ・現代の論理学も言語の2つのレベルを峻別する必要があるとしてこれを取り上げた。すなわち、(言語コードについて語る)メタ言語の対象になる「対象言語」(object language)と、他方では、言語コード自体について語るための言語との区別である。言語の後者のような側面は、1930年代、アルフレッド・タルスキー(Alfred Tarski)の創始したポーランド語の術語をなぞって「メタ言語」(metalinguage)と呼ばれる。[中略] 送り手や受け手に、はたして自分たちが同じコードを使っているかどうかを確かめる必要の生じたとき、つねに言

- 語は<コード>に焦点が合わされ、こうして<メタ言語的>（metalingualあるいは注解的）機能をはたすことになる。
3. 尤も、この「言語感覚」を支える認知レベルでのプロトタイプ判断は、微視的レベルでは、個々の人によって差がある。
 4. テキスト間のメタ語用的な過程の連鎖／指標の連鎖を通して、後続する出来事の連鎖によって（再）形成、指標、再テキスト化され／読み直され続け、それと共に後続する出来事群がテキスト化されてゆき、そのようにして、これらのテキストの「意味」（解釈可能性）が、より決定的となったり、決定性を失ったりするというプロセスが延々、原理上は永久に、繰り返されることにおける対象となる原典たる「プロト」テキスト（Ur-Text）とは異なる（小山, 2011a）。

参考文献

- 安西徹雄・井上健・小林章夫（編）（2005）. 『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社.
- Baker, M. (1992/2011). *In other words*. London & New York: Routledge.
- Bassnett, S. (2002). *Translation studies*. London & New York: Routledge.
- Delisle, J. (1982/1988). *Translation: An interpretive approach (Translation Studies 8)*. Ottawa: University of Ottawa Press.
- 藤本一勇（2009）. 『ヒューマニティーズ 外国語学』岩波書店.
- 深谷昌弘・田中茂範（1996）. 『コトバの<意味づけ論>』紀伊国屋書店.
- ジュネット, G. (2004). 『フィクションとディクシオン—ジャンル・物語論・文体』（和泉涼一・尾河直哉・訳）水声社. [原著：Genette, G. (1991). *Fiction et diction*. Paris: Seuil].
- Hymes, D. (1972). Models of the interaction of language and social life. In Gumperz, J. & Hymes, D. (Eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication* (pp. 35-71). New York: Holt, Rinehart & Winston.
- ヤコブソン, R. (1984). 『言語とメタ言語』（池上嘉彦・山中桂一・訳）. 勁草書房. [原著：Jakobson, R. (1980). *Framework of language*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press].
- 河原清志（2014a）. 「翻訳ストラテジー論の批判的考察」日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト（編）『翻訳研究への招待』第12号, 121-140頁.
- 河原清志（2014b）. 「翻訳シフト論の潮流と社会記号論からのメタ理論的総括」『金城学院大学論集』第11巻第1号, 7-30頁.
- 河原清志（2015a）. 「翻訳等価性再考—社会記号論による翻訳学のメタ理論研究」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科提出博士学位申請論文 [未刊行].
- 河原清志（2015b）. 「翻訳規範と記述的翻訳研究の批判的検討」日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト（編）『翻訳研究への招待』第13号, 1-28頁.
- 河原清志（2015c）. 「翻訳学におけるイデオロギー研究の潮流の社会記号論による分析」『金城学院大学論集』第11巻第2号, 40-57頁.
- Kay, P. (1996). Intra-speaker relativity. In J. J. Gumperz & S. C. Levinson (Eds.), *Rethinking linguistic relativity*. (pp. 97-114). Cambridge: Cambridge University Press.
- Koller, W. (1979). Equivalence in translation theory. translated from the German by Chesterman, A. In A. Chesterman, (Ed.), (1989). *Readings in translation theory* (pp. 99-104). Helsinki: Finn Lectura.
- 小山亘（2009）. 『記号の思想』三元社.
- 小山亘（2011a）. 『近代言語イデオロギー論』三元社.
- 小山亘（2011b）. 「社会言語学的多様性と翻訳不可能性：メタ語用、言語変種／接触、社会指標性と記号論の全体」翻訳論研究会講演会（日本記号学会研究プロジェクト）招待講演資料（2011年3月大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室）.
- Lederer, M. (1994). *La traduction aujourd'hui*. Paris: Hachette.
- メイナード泉子（2004）. 『談話言語学：日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版.
- Munday, J. (2008/2012). *Introduction to Translation Studies*. London/New York: Routledge.
- 中村明（1993）. 『日本語の文体—文芸作品の表現

- をめぐって』岩波書店.
- Silverstein, M. (1981). Case marking and the nature of language. *Australian Journal of Linguistics* 1, 227-244.
- Silverstein, M. (1985). Noun phrase categorical markedness and syntactic parametricization. *ESCOL* 2, 337-361. Department of Linguistics, Ohio State University: Columbus, Ohio. [Read to Eastern States Conference on Linguistics, SUNY Buffalo, October 1985.]
- 菅井三実 (2013). 「認知能力 (cognitive ability / faculty)」辻幸夫 (編) 『新編 認知言語学キーワード事典』(281頁). 研究社.
- スウィーツァー, E. (2000). 『認知意味論の展開 語源学から語用論まで』(澤田治美・訳). 研究社. [原著: Sweetser, E. (1990). *From etymology to pragmatics Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press].
- 田中茂範・深谷昌弘 (1998). 『<意味づけ論>の展開』紀伊国屋書店.
- van Leuven-Zwart, K. (1989). Translation and original: Similarities and dissimilarities, I. *Target*, 1 (2), 151-181.
- van Leuven-Zwart, K. (1990). Translation and original: Similarities and dissimilarities, II. *Target*, 2 (1), 69-95.
- 山梨正明 (2004). 『ことばの認知空間』開拓社.